

「莫迦野郎《ばかやろう》！ おれたちは死ぬのが役目じゃないか？」
その時もう白襪隊は、河原の向うへ上っていた。そこには泥を塗《ぬ》り固めた、支那人の民家が七八軒、ひ

つそりと暁《あかつき》を迎えている、その家々の屋根の上には、石油色に髷《ひだ》をなぞった、寒い茶褐色の松樹山《しょうじゅざん》が、目の前に迫って見えるのだった。隊はこの村を離れると、四列側面の隊形を解いた。のみならずいずれも武装したまま、幾条かの交通路に腹這《はらば》いながら、じりじり敵前へ向う事になった。

[illegible]

「来た。来た。お前はどこの聯隊《れんたい》だ？」

江木上等兵はあたりを見た。隊はいつか松樹山の麓《ふもと》の、集合地へ着いているのだった。そこにはもうカアキイ服に、古めかしい襷《たすき》をあやどった、各師団の兵が集まっている、彼に声をかけたのも、そう云う連中の一人だった。その兵は石に腰をかけながら、うっすり流れ出した朝日の光に、片頬の面皰《にきび》をつぶしていた。

「第×聯隊だ。」

「パン聯隊だな。」

江木上等兵は暗い顔をしたまま、何ともその冗談《じょうだん》に答えなかった。

何時間かの後《のち》、この歩兵陣地の上には、もう彼我《ひが》の砲弾が、凄《すさ》まじい唸《うな》りを飛ばせていた。目の前に聳えた松樹山の山腹にも、李家屯《りかとん》の我海軍砲は、幾たびか黄色い土煙《つちけむり》を揚げた。その土煙の舞い上《あが》る合間《あいま》に、薄紫の光が迸《ほどばし》るのも、昼だけに、一層悲壮だった。しかし二千人の白襪隊《しろだすきたい》は、こう云う砲撃の中に機《き》を待ちながら、やはり平生の元気を失わなかった。また恐怖に挫《ひし》がれないためには、出来るだけ陽気に振舞《ふるま》うほか、仕様のない事も事実だった。

「べらぼうに撃ちやがるな。」

堀尾一等卒は空を見上げた。その拍子《ひょうし》に長い叫び声が、もう一度頭上の空気を裂《さ》いた。彼は思わず首を縮《ちぢ》めながら、砂埃《すなほこり》の立つのを避けるためか、手巾《ハンカチ》に鼻を掩《おお》っていた、田口《たぐち》一等卒に声をかけた。

「今のは二十八珊《にじゅうはっサンチ》だぜ。」

田口一等卒は笑って見せた。そうして相手が気のつかないように、そっとポケットへ手巾《ハンカチ》をおさめた。それは彼が出征する時、馴染《なじみ》の芸者に貰って来た、縁《ふち》に繡《ぬい》のある手巾《ハンカチ》だった。

「音が違うな、二十八 | 珊《サンチ》は。」

田口一等卒はこう云うと、狼狽《ろうばい》したように姿勢を正した。同時に大勢《おおぜい》の兵たちも、声のない号令《ごうれい》でもかかったように、次から次へと立ち直り始めた。それはこの時彼等の間へ、軍司令官のN将軍が、何人かの幕僚《ばくりょう》を従えながら、厳然と歩いて来たからだった。

「こら、騒いではいかん。騒ぐではない。」

將軍は陣地を見渡しながら、やや錆《さび》のある声を伝えた。

「こう云う狭隘《きょうあい》な所だから、敬礼も何もせなくとも好《よ》い。お前達は何聯隊の白襷隊《しろだすきたい》じゃ？」

田口一等卒は將軍の眼が、彼の顔へじっと注がれるのを感じた。その眼はほとんど処女のように、彼をはにかませるのに足るものだった。

「はい。歩兵第×聯隊であります。」

「そうか。大元氣《おおげんき》にやってくれ。」

將軍は彼の手を握った。それから堀尾《ほりお》一等卒へ、じろりとその眼を転ずると、やはり右手をさし伸《の》べながら、もう一度同じ事を繰返《くりかえ》した。

「お前も大元気にやってくれ。」

こう云われた堀尾一等卒は、全身の筋肉が硬化《こうか》したように、直立不動の姿勢になった。幅の広い肩、大きな手、頬骨《ほおぼね》の高い赭《あか》ら顔。　　そう云う彼の特色は、少くともこの老將軍には、帝國軍人の模範《もはん》らしい、好印象を与えた容子《ようす》だった。將軍はそこに立ち止まったまま、熱心になお話し続けた。

そこには旅団参謀のほかにも、副官が一人、通訳が一人、二人の支那人を囲《かこ》んでいた。支那人は通訳の質問通り、何でも明瞭《めいりょう》に返事をした。のみならずやや年嵩《としかさ》らしい、顔に短い髭《ひげ》のある男は、通訳がまだ尋ねない事さえ、進んで説明する風があった。が、その答弁は参謀の心に、明瞭

ならば明瞭なだけ、一層彼等を間牒にしたい、反感に似たものを与えるらしかった。

「おい歩兵《ほへい》！」

旅団参謀は鼻声に、この支那人を捉《とら》えて来た、戸口にいる歩哨を喚《よ》びかけた。歩兵、それは白襪隊《しろだすきたい》に加わっていた、田口《たぐち》一等卒《いっとうそつ》にほかならなかった。

彼は戸の卍字格子《まんじごうし》を後に、芸者の写真へ目をやっていたが、参謀の声に驚かされると、思い切り大きい答をした。

「はい。」

「お前だな、こいつらを掴《つか》まえたのは？ 掴まえた時どんなだったか？」

人の好《い》い田口一等卒は、朗読的にしゃべり出した。

「私《わたくし》が歩哨《ほしょう》に立っていたのは、この村の土堀《どべい》の北端、奉天《ほうてん》に通ずる街道《かいどう》であります。その支那人は二人とも、奉天の方向から歩いて来ました。すると木の上の中隊長が、

「何、木の上の中隊長？」

参謀はちょっと目蓋《まぶた》を挙げた。

「はい。中隊長は展望《てんぼう》のため、木の上に登っていられたのであります。その中隊長が木の上から、掴《つか》まえろと私に命令されました。」

「ところが私が捉《とら》えようとすると、そちらの男が、はい。その髭のない男であります。その男が急に逃げようとなりました。……」

「それだけか？」

「はい。それだけです。」

「よし。」

旅団参謀は血肥《ちぶと》りの顔に、多少の失望を浮べたまま、通訳に質問の意を伝えた。通訳は退屈《たいくつ》を露《あらわ》さないため、わざと声に力を入れた。

「間牒でなければ何故《なぜ》逃げたか？」

「それは逃げるのが当然です。何しろいきなり日本兵が、躍《おど》りかかってきたのですから。」

もう一人の支那人、鴉片《あへん》の中毒に罹《かか》っているらしい、鉛色の皮膚《ひふ》をした男は、少しも怯《ひる》まずに返答した。

「しかしお前たちが通って来たのは、今にも戦場になる街道《かいどう》じゃないか？ 良民ならば用もないのに、

支那語の出来る副官は、血色の悪い支那人の顔へ、ちらりと意地の悪い眼を送った。

「いや、用はあるのです。今も申し上げた通り、私《わたくし》たちは新民屯《しんみんとん》へ、紙幣《しへい》を取り換えに出かけて来たのです。御覧下さい。ここに紙幣もあります。」

髭《ひげ》のある男は平然と、将校たちの顔を眺め廻した。参謀はちょっと鼻を鳴らした。彼は副官のたじろいだのが、内心 | 好《い》い気味に思われたのだ。……

「紙幣を取り換える？ 命がけでか？」

副官は負惜《まけおし》みの冷笑を洩らした。

「とにかく裸にして見よう。」

参謀の言葉が通訳されると、彼等はやはり悪びれずに、早速 | 赤裸《あかはだか》になって見せた。

「まだ腹巻《はらまき》をしているじゃないか？ それをこっちへとって見せろ。」

通訳が腹巻を受けとる時、その白木綿《しろもめん》に体温のあるのが、何だか不潔に感じられた。腹巻の中には三寸ばかりの、太い針がはいっていた。旅団参謀は窓明りに、何度もその針を検《しら》べて見た。が、それも平たい頭に、梅花《ばいか》の模様ががついているほか、何も変わった所はなかった。

「何か、これは？」

「私《わたくし》は鍼医《はりい》です。」

髭のある男はためらわずに、悠然と参謀の問に答えた。

「次手《ついで》に靴《くつ》も脱《ぬ》いで見ろ。」

彼等はほとんど無表情に、隠すべき所も隠そうとせず、検査の結果を眺めていた。が、ズボンや上着は勿論、靴や靴下を検べて見ても、証拠になる品は見当らなかった。この上は靴を壊《こわ》して見るよりほかはない。

そう思った副官は、参謀にその旨を話そうとした。

その時突然次の部屋から、軍司令官を先頭に、軍司令部の幕僚《ばくりょう》や、旅団長などがはいって来た。將軍は副官や軍参謀と、ちょうど何かの打ち合せのため、旅団長を尋ねて来ていたのだった。

「露探《ろたん》か？」

將軍はこう尋ねたまま、支那人の前に足を止めた。そうして彼等の裸姿《はだかすがた》へ、じっと鋭い眼を注いだ。後《のち》にある亜米利加《アメリカ》人が、この有名な將軍の眼には、Monomania じみた所があると、無遠慮な批評を下した事がある。そのモノメニアックな眼の色が、殊にこう云う場合には、気味の悪い輝

きを加えるのだった。

旅団参謀は將軍に、ざっと事件の顛末《てんまつ》を話した。が、將軍は思い出したように、時々「うなず」いて見せるばかりだった。

「この上はもうぶん擲《なく》ってでも、白状させるほかはないのですが、」

参謀がこう云いかけた時、將軍は地図《ちず》を持った手に、床《ゆか》の上にある支那靴を指《ゆびさ》した。

「あの靴を壊《こわ》して見給え。」

靴は見る見る底をまくられた。するとそこに縫いこまれた、四五枚の地図と秘密書類が、たちまちばらばらと床の上に落ちた。二人の支那人はそれを見ると、さすがに顔の色を失ってしまった。が、やはり押し黙ったまま、剛情《ごうじょう》に敷瓦を見つめていた。

「そんな事だろうと思っていた。」

將軍は旅団長を顧みながら、得意そうに微笑を洩《もら》した。

「しかし靴とはまた考えたものですね。おい、もうその連中《れんじゅう》には着物を着せてやれ。こんな間牒《かんちょう》は始めてです。」

「軍司令官閣下の炯眼《けいがん》には驚きました。」

旅団副官は旅団長へ、間牒の証拠品を渡しながら、愛嬌《あいきょう》の好《い》い笑顔を見せた。あたかも靴に目をつけたのは、將軍よりも彼自身が、先だった事も忘れたように。

「だが裸にしてもないとすれば、靴よりほかに隠せないじゃないか？」

將軍はまだ上機嫌だった。

「わしはすぐに靴と睨《にら》んだ。」

「どうもこの辺の住民はいけません。我々がここへ来た時も、日の丸の旗を出したのですが、その癖家の中を検《しら》べて見れば、大抵「露西亞《ロシア》」の旗を持っているのです。」

旅団長も何か浮き浮きしていた。

「つまり奸佞邪智《かんねいじゃち》なのじゃね。」

「そうです。煮ても焼いても食えないのです。」

こんな会話が續いている内、旅団参謀はまだ通訳と、二人の支那人を調べていた。それが急に田口一等卒へ、機嫌の悪い顔を向けると、吐《は》き出すようにこう命じた。

「おい歩兵！ この間牒はお前が掴《つか》まえて来たのだから、次手《ついで》にお前が殺して来い。」

二十分の後《のち》、村の南端の路ばたには、この二人の支那人が、互に辮髪《べんぱつ》を結ばれたまま、枯柳《かれやなぎ》の根がたに坐っていた。

田口一等卒は銃剣をつけると、まず辮髪を解き放した。それから銃を構えたまま、年下の男の後《うしろ》に立った。が、彼等を突殺す前に、殺すと云う事だけは告げたいと思った。

「[# 「にんべん+爾」、第3水準1-14-45] 《ニイ》、」

彼はそう云って見たが、「殺す」と云う支那語を知らなかった。

「[# 「にんべん+爾」、第3水準1-14-45] 《ニイ》、殺すぞ！」

二人の支那人は云い合せたように、じろりと彼を振り返った。しかし驚いたけはいも見せず、それぎり別々の方角へ、何度も叩頭《こうとう》を続け出した。「故郷へ別れを告げているのだ。」田口一等卒は身構えながら、こうその叩頭を解釈した。

叩頭が一通り済んでしまうと、彼等は覚悟をきめたように、冷然と首をさし伸した。田口一等卒は銃をかざした。が、神妙な彼等を見ると、どうしても銃剣が突き刺せなかった。

「[# 「にんべん+爾」、第3水準1-14-45] 《ニイ》、殺すぞ！」

彼はやむを得ず繰返した。するとそこへ村の方から、馬に跨《またが》った騎兵が一人、蹄《ひづめ》に砂埃《すなほこり》を巻き揚げて来た。

「歩兵！」

騎兵は近づいたのを見れば曹長《そうちょう》だった。それが二人の支那人を見ると、馬の歩みを緩《ゆる》めながら、傲然《ごうぜん》と彼に声をかけた。

「露探《ろたん》か？ 露探だろう。おれにも、一人斬らせてくれ。」

田口一等卒は苦笑《くしょう》した。

「何、二人とも上げます。」

「そうか？ それは氣前が好《い》いな。」

騎兵は身軽に馬を下りた。そうして支那人の後《うしろ》にまわると、腰の日本刀を抜き放した。その時また村の方から、勇しい馬蹄《ばてい》の響と共に、三人の将校が近づいて来た。騎兵はそれに頓着《とんちゃく》せず、まっ向《こう》に刀《とう》を振り上げた。が、まだその刀を下《おろ》さない内に、三人の将校は悠々と、彼等の側へ通りかかった。軍司令官！ 騎兵は田口一等卒と一しょに、馬上の將軍を見上げながら、正しい拳手の礼をした。

「露探《ろたん》だな。」

將軍の眼には一瞬間、モノメニアの光が輝いた。

「斬れ！ 斬れ！」

騎兵は言下《ごんか》に刀をかざすと、一打《ひとうち》に若い支那人を斬《き》った。支那人の頭は躍るように、枯柳の根もとに転《ころ》げ落ちた。血は見る見る黄ばんだ土に、大きい斑点《はんでん》を拡げ出した。

「よし。見事だ。」

將軍は愉快そうに頷《うなず》きながら、それなり馬を歩ませて行った。

騎兵は將軍を見送ると、血に染《そ》んだ刀《とう》を提《ひっさ》げたまま、もう一人の支那人の後《うしろ》に立った。その態度は將軍以上に、殺戮《さつりく》を喜ぶ気色《けしき》があった。「この×××らばおれにも殺せる。」 田口一等卒はそう思いながら、枯柳の根もとに腰を下《おろ》した。騎兵はまた刀《とう》を振り上げた。が、髯《ひげ》のある支那人は、黙然《もくねん》と首を伸ばしたぎり、睫毛《まつげ》一つ動かさなかった。……

將軍に従った軍参謀の一人、穂積《ほづみ》中佐《ちゅうさ》は鞍《くら》の上に、春寒《しゅんかん》の曠野《こうや》を眺めて行った。が、遠い枯木立《かれこだち》や、路ばたに倒れた石敢当《せきかんとう》も、中佐の眼には映らなかった。それは彼の頭には、一時愛読したスタンダールの言葉が、絶えず漂って来るからだった。

「私《わたし》は勲章《くんしょう》に埋《うずま》った人間を見ると、あれだけの勲章を手に入れるには、どのくらい××な事ばかりしたか、それが気になって仕方がない。……」

ふと気がつけば彼の馬は、ずっと將軍に遅れていた。中佐は軽い身震《みぶるい》をすると、すぐに馬を急がせ出した。ちょうど当り出した薄日の光に、飾緒《かざりお》の金《きん》をきらめかせながら。

三 陣中の芝居

明治三十八年五月四日の午後、阿吉牛堡《あきつぎゅうほう》に駐《とどま》っていた、第×軍司令部では、午前に招魂祭《しょうこんさい》を行った後《のち》、余興《よきょう》の演芸会を催《もよお》す事になった。会場は支那の村落に多い、野天《のでん》の戲台《ぎだい》を応用した、急拵《きゅうごしらえ》の舞台の前に、天幕《テント》を張り渡したに過ぎなかった。が、その蓆敷《むしろじき》の会場には、もう一時の定刻 | 前《ぜん》に、大勢《おおぜい》の兵卒が集っていた。この薄汚いカアキイ服に、銃剣を下げた兵卒の群《むれ》は、ほとんど看客《かんかく》と呼ぶのさえも、皮肉な感じを起させるほど、みじめな看客に違いなかった。が、それだけまた彼等の顔に、晴れ晴れした微笑が漂っているのは、一層 | 可憐《かれん》な気がするのだった。

將軍を始め軍司令部や、兵站監部《へいたんかんぶ》の将校たちは、外国の従軍武官たちと、その後《うしろ》の小高い土地に、ずらりと椅子《いす》を並べていた。そこには参謀肩章だの、副官の襷《たすき》だのが見えるだけでも、一般兵卒の看客《かんかく》席より、遥かに空気が花やかだった。殊に外国の従軍武官は、愚物《ぐぶつ》の名の高い一人でさえも、この花やかさを扶《たす》けるためには、軍司令官以上の効果があった。

將軍は今日も上機嫌《じょうきげん》だった。何か副官の一人と話しながら、時々番付を開いて見ている、その眼にも始終日光のように、人懐《ひとなつ》こい微笑が浮んでいた。

その内に定刻の一時になった。桜の花や日の出をとり合せた、手際の好《い》い幕の後《うしろ》では、何度か鳴りの悪い拍子木《ひょうしぎ》が響いた。と思うとその幕は、余興掛の少尉の手に、するすると一方へ引かれて行った。

舞台は日本の室内だった。それが米屋の店だと云う事は、一隅に積まれた米俵が、わずかに暗示を与えていた。そこへ前垂掛《まえだれが》けの米屋の主人が、「お鍋《なべ》や、お鍋や」と手を打ちながら、彼自身よりも背《せ》の高い、銀杏返《いちょうがえ》しの下女を呼び出して来た。それから、筋は話すにも足りない、一場《いちじょう》の俄《にわか》が始まった。

舞台の悪ふざけが加わる度に、蓆敷《むしろじき》の上の看客からは、何度も笑声《しょうせい》が立ち昇《のぼ》った。いや、その後《うしろ》の将校たちも、大部分は笑《わらい》を浮べていた。が、俄はその笑と競《きそ》うように、ますます滑稽《こっけい》を重ねて行った。そうしてとうとうしまいには、越中襪《えっちゅうふんどし》一つの主人が、赤い湯もじ一つの下女と相撲《すもう》をとり始める所になった。

笑声はさらに高まった。兵站監部《へいたんかんぶ》のある大尉なぞは、この滑稽を迎えるため、ほとんど拍手さえしようとした。ちょうどその途端だった。突然烈しい叱咤《しった》の声は、湧き返っている笑の上へ、鞭《むち》を加えるように響き渡った。

「何だ、その醜態《しゅうたい》は？ 幕を引け！ 幕を！」

声の主《ぬし》は將軍だった。將軍は太い軍刀の [# 「木 + 覇」、第4水準2-15-85] 《つか》に、手袋の両手を重ねたまま、厳然と舞台を睨《にら》んで居た。

幕引きの少尉は命令通り、呆気《あっけ》にとられた役者たちの前へ、倉皇《そうこう》とさっきの幕を引いた。同時に蓆敷の看客も、かすかなどよめきの声のほかは、ひっそりと静まり返ってしまった。

外国の従軍武官たちと、一つ席にいた穂積《ほづみ》中佐は、この沈黙を気の毒に思った。俄は勿論彼の顔には、微笑さえも浮ばせなかった。しかし彼は看客の興味に、同情を持つだけの余裕はあった。では外国武官たちに、裸《はだか》の相撲を見せても好《い》いか？　そう云う体面を重ずるには、何年か欧洲《おうしゅう》に留学した彼は、余りに外国人を知り過ぎていた。

「どうしたのですか？」

仏蘭西《フランス》の将校は驚いたように、穂積中佐をふりかえった。

「将軍が中止を命じたのです。」

「なぜ？」

「下品ですから、　　将軍は下品な事は嫌いなのです。」

そう云う内にもう一度、舞台の拍子木《ひょうしぎ》が鳴り始めた。静まり返っていた兵卒たちは、この音に元気を取り直したのか、そこここから拍手《はくしゅ》を送り出した。穂積中佐もほっとしながら、彼の周囲を眺め廻した。周囲にい並んだ将校たちは、いずれも幾分か気兼ね《きがね》そうに、舞台を見たり見なかったりしている、　　その中にたった一人、やはり軍刀へ手をのせたまま、ちょうど幕の開《あ》き出した舞台へ、じっと眼を注いでいた。

次の幕は前と反対に、人情がかった旧劇だった。舞台にはただ屏風《びょうぶ》のほかに、火のともった行燈《あんどう》が置いてあった。そこに頬骨の高い年増《としま》が一人、猪首《いくび》の町人と酒を飲んでいて。年増は時々|金切声《かなきりごえ》に、「若旦那《わかだんな》」と相手の町人を呼んだ。そうして、

穂積中佐は舞台を見ずに、彼自身の記憶に浸《ひた》り出した。柳盛座《りゅうせいざ》の二階の手すりには、十二三の少年が倚《よ》りかかっている。舞台には桜の釣り枝がある。火影《ほかげ》の多い町の書割《かきわり》がある。その中に二銭《にせん》の団洲《だんしゅう》と呼ばれた、和光《わこう》の不破伴左衛門《ふわばんざえもん》が、編笠《あみがさ》を片手に見得《みえ》をしている。少年は舞台に見入ったまま、ほとんど息さえもつこうとしない。彼にもそんな時代があった。……

「余興やめ！　幕を引かんか？　幕！　幕！」

将軍の声は爆弾のように、中佐の追憶を打ち砕《くだ》いた。中佐は舞台へ眼を返した。舞台にはすでに狼狽《ろうばい》した少尉が、幕と共に走っていた。その間《あいだ》にちらりと屏風の上へ、男女の帯の懸かっているのが見えた。

中佐は思わず苦笑《くしょう》した。「余興掛も気が利《き》かなすぎる。男女の相撲さえ禁じている将軍が、濡《ぬ》れ場《ば》を黙って見ている筈がない。」　　そんな事を考えながら、叱声《しっせい》の起った席を見ると、将軍はまだ不機嫌そうに、余興掛の一等主計《いっとうしゅけい》と、何か問答を重ねていた。

その時ふと中佐の耳は、口の悪い亜米利加《アメリカ》の武官が、隣に坐った仏蘭西《フランス》の武官へ、こう話しかける声を捉《とら》えた。

「将軍Nも楽《らく》じゃない。軍司令官兼|検閲官《けんえつかん》だから、　　」

やっと三幕目《みまくめ》が始まったのは、それから十分の後《のち》だった。今度は木がはいっても、兵卒たちは拍手を送らなかった。

「可哀《かわい》そうに。監視《かんし》されながら、芝居を見ているようだ。」　　穂積中佐は憐むように、ほとんど大きな話声も立てない、カアキイ服の群《むれ》を見渡した。

三幕目の舞台は黒幕の前に、柳の木が二三本立ててあった。それはどこから伐《き》って来たか、生々《なまなま》しい実際の葉柳だった。そこに警部らしい髭《ひげ》だらけの男が、年の若い巡查をいじめていた。穂積《ほづみ》中佐は番附の上へ、不審そうに眼を落した。すると番附には「ピストル強盗《ごうとう》清水定吉《しみずさだきち》、大川端《おおかわばた》捕物《とりもの》の場《ば》」と書いてあった。

年の若い巡查は警部が去ると、大仰《おおぎょう》に天を仰ぎながら、長々《ながなが》と浩歎《こうたん》の独白《どくはく》を述べた。何でもその意味は長い間《あいだ》、ピストル強盗をつけ廻しているが、逮捕《たいほ》出来ないとか云うのだった。それから人影でも認めたのか、彼は相手に見つからないため、一まず大川の水の中へ姿を隠そうと決心した。そうして後《うしろ》の黒幕の外へ、頭からさきに這《は》いこんでしまった。その恰好《かっこう》は鼻屑眼《ひいきめ》に見ても、大川の水へ没するよりは、蚊帳《かや》へはいるのに適当していた。

空虚の舞台にはしばらくの間《あいだ》、波の音を思わせるらしい、大太鼓《おおだいこ》の音がするだけだった。と、たちまち一方から、盲人が一人歩いて来た。盲人は杖をつき立てながら、そのまま向うへはいろいろとする、　　その途端《とたん》に黒幕の外から、さっきの巡查が飛び出して来た。「ピストル強盗、清水定吉、御用だ！」　　彼はそう叫ぶが早いか、いきなり盲人へ躍りかかった。盲人は咄嗟《とっさ》に身構えをした。と思うと眼がぱっちりあいた。「憾《うら》むらくは眼が小さ過ぎる。」　　中佐は微笑を浮かべながら、内心|大人気《おとなげ》ない批評を下した。

舞台では立ち廻りが始まっていた。ピストル強盗は渾名《あだな》通り、ちゃんとピストルを用意していた。

二発、三発、ピストルは続けさまに火を吐《は》いた。しかし巡査は勇敢に、とうとう偽《にせ》目くらに縄《なわ》をかけた。兵卒たちはさすがにどよめいた。が、彼等の間からは、やはり声一つかからなかった。

中佐は將軍へ眼をやった。將軍は今度も熱心に、じっと舞台を眺めていた。しかしその顔は以前よりも、遙かに柔《やさ》しみを湛《たた》えていた。

そこへ舞台には一方から、署長とその部下とが駈《か》けつけて来た。が、偽目くらと格闘中、ピストルの弾丸《たま》に中《あた》った巡査は、もう昏々《こんこん》と倒れていた。署長はすぐに活《かつ》を入れた。その間《あいだ》に部下はいち早く、ピストル強盗の縄尻《なわじり》を捉《とら》えた。その後《あと》は署長と巡査との、旧劇めいた愁歎場《しゅうたんば》になった。署長は昔の名奉行《めいぶぎょう》のように、何か云い遺《のこ》す事はないかと言う。巡査は故郷に母がある、と言う。署長はまた母の事は心配するな。何かそのほかにも末期《まつご》の際に、心遣りはないかと言う。巡査は何も云う事はない、ピストル強盗を捉えたのは、この上もない満足だと云う。

その時ひっそりした場内に、三度《さんど》將軍の声が響いた。が、今度は叱声《しっせい》の代りに、深い感激の嘆声だった。

「偉い奴じゃ。それでこそ日本男児《にっぽんだんじ》じゃ。」

穂積中佐はもう一度、そっと將軍へ眼を注いだ。すると日に焼けた將軍の頬《ほお》には、涙の痕《あと》が光っていた。「將軍は善人だ。」中佐は軽い侮蔑《ぶべつ》の中《うち》に、明るい好意を感じ出した。

その時幕は悠々と、盛んな喝采《かっさい》を浴びながら、舞台の前に引かれて行った。穂積《ほづみ》中佐はその機会に、ひとり椅子《いす》から立ち上ると、会場の外へ歩み去った。

三十分の後《のち》、中佐は紙巻を啣《くわ》えながら、やはり同參謀の中村《なかむら》少佐と、村はずれの空地《あきち》を歩いていた。

「第×師団の余興は大成功だね。N閣下は非常に喜んでいられた。」

中村少佐はこう云う間《あいだ》も、カイゼル髭《ひげ》の端《はし》をひねっていた。

「第×師団の余興？ ああ、あのピストル強盗か？」

「ピストル強盗ばかりじゃない。閣下はあれから余興掛を呼んで、もう一幕臨時にやれと云われた。今度は赤垣源蔵《あかがきげんぞう》だったがね。何と云うのかな、あれは？ 德利《とくり》の別れか？」

穂積中佐は微笑した眼に、広い野原を眺めまわした。もう高粱《こうりょう》の青んだ土には、かすかに陽炎《かげろう》が動いていた。

「それもまた大成功さ。」

中村少佐は話し続けた。

「閣下は今夜も七時から、第×師団の余興掛に、寄席《よせ》的な事をやらせるそうだけ。」

「寄席的？ 落語《らくご》でもやらせるのかね？」

「何、講談だそうさ。水戸黄門《みとこうもん》諸国めぐり。」

穂積中佐は苦笑《くしょう》した。が、相手は無頓着に、元気のよい口調を続けて行った。

「閣下は水戸黄門が好きなのだそうさ。わしは人臣としては、水戸黄門と加藤清正《かとうきよまさ》とに、最も敬意を払っている。そんな事を云っていられた。」

穂積中佐は返事をせずに、頭の上の空を見上げた。空には柳の枝の間《あいだ》に、細い雲母雲《きららぐも》が吹かれていた。中佐はほっと息を吐《は》いた。

「春だね、いくら満洲《まんしゅう》でも。」

「内地はもう袷《あわせ》を着ているだろう。」

中村少佐は東京を思った。料理の上手な細君を思った。小学校へ行っている子供を思った。そうしてかすかに憂鬱になった。

「向うに杏《あんず》が咲いている。」

穂積中佐は嬉しそうに、遠い土壩に簇《むらが》った、赤い花の塊りを指した。Ecoute-moi, Madeline.....

中佐の心にはいつのまにか、ユウゴオの歌が浮んでいた。

四 父と子と

大正七年十月のある夜、中村《なかむら》少将、当時の軍參謀中村少佐は、西洋風の応接室に、火のついたハヴァナを啣《くわ》えながら、ぼんやり安楽椅子によりかかっていた。

二十余年の閑日月《かんじつげつ》は、少将を愛すべき老人にしていた。殊に今夜は和服のせいか、禿《は》げ上《あが》った額のあたりや、肉のたるんだ口のまわりには、一層好人物じみた気色《けしき》があった。少将は椅子《いす》の背《せ》に靠《もた》れたまま、ゆっくり周囲を眺め廻した。それから、急にため息を洩らした。

室の壁にはどこを見ても、西洋の画《え》の複製らしい、写真版の額《がく》が懸《か》けてあった。そのある物は窓に倚《よ》った、寂しい少女の肖像《しょうぞう》だった。またある物は糸杉の間《あいだ》に、太陽

の見える風景だった。それらは皆電燈の光に、この古めかしい応接室へ、何か妙に薄ら寒い、厳肅《げんしゆく》な空気を与えていた。が、その空気はどう云う訣《わけ》か、少将には愉快でないらしかった。

無言《むごん》の何分かが過ぎ去った後《のち》、突然少将は室外に、かすかなノックの音を聞いた。

「おはいり。」

その声と同時に室の中へは、大学の制服を着た青年が一人、背の高い姿を現した。青年は少将の前に立つと、そこにあった椅子に手をやりながら、ぶっきらぼうにこう云った。

「何か御用ですか？ お父さん。」

「うん。まあ、そこにおかけ。」

青年は素直《すなお》に腰を下《おろ》した。

「何です？」

少将は返事をするために、青年の胸の金鈕《きんボタン》へ、不審《ふしん》らしい眼をやった。

「今日《きょう》は？」

「今日は河合《かわい》の お父さんは御存知ないでしょう。 僕と同じ文科の学生です。河合の追悼会《ついつうかい》があったものですから、今帰ったばかりなのです。」

少将はちょいと頷《うなず》いた後《のち》、濃いハヴァナの煙を吐いた。それからやっと大儀《たいぎ》そうに、肝腎《かんじん》の用向きを話し始めた。

「この壁にある画《え》だね、これはお前が懸け換えたのかい？」

「ええ、まだ申し上げませんでした。今朝《けさ》僕が懸け換えたのです。いけませんか？」

「いけなくはない。いけなくはないがね、N閣下の額だけは懸けて置きたい、と思う。」

「この中へですか？」

青年は思わず微笑した。

「この中へ懸けてはいけませんか？」

「いけなくとも云う事ありませんが、 しかしそれは可笑《おか》しいでしょう。」

「肖像画《しょうぞうが》はあそこにもあるようじゃないか？」

少将は炉《ろ》の上の壁を指した。その壁には額縁の中に、五十何歳かのレムブランドが、悠々と少将を見下していた。

「あれは別です。N將軍と一しょにはなりません。」

「そうか？ じゃ仕方がない。」

少将は容易に断念した。が、また葉巻の煙を吐きながら、静かにこう話を続けた。

「お前は、 と云うよりもお前の年輩のものは、閣下をどう思っているね？」

「別にどうも思っていない。まあ、偉い軍人でしょう。」

青年は老いた父の眼に、晩酌《ばんしゃく》の酔《よい》を感じていた。

「それは偉い軍人だがね、閣下はまた実に長者《ちょうじゃ》らしい、人懐《ひとなつ》こい性格も持っていた。……」

少将はほとんど、感傷的に、將軍の逸話《いつわ》を話し出した。それは日露戦役後、少将が那須野《なすの》の別荘に、將軍を訪れた時の事だった。その日別荘へ行って見ると、將軍夫妻は今し方、裏山へ散歩にお出かけになった、 と言う別荘番の話だった。少将は案内を知っていたから、早速《さっそく》裏山へ出かける事にした。すると二三町行った所に、綿服を纏《まと》った將軍が、夫人と一しょに佇《たたず》んでいた。少将はこの老夫妻と、しばらくの間《あいだ》立ち話をした。が、將軍はいつまでたっても、そこを立ち去ろうとしなかった。「何かここに用でもおありですか？」 　　こう少将が尋ねると、將軍は急に笑い出した。「実はね、今|妻《さい》が憚《はばか》りへ行きたいと云うものだから、わたしたちについて来た学生たちが、場所を探しに行ってくれた所じゃ。」 　　ちょうど今頃、 　　もう路ばたに毬栗《いがぐり》などが、転がっている時分だった。

少将は眼を細くしたまま、嬉しそうに独り微笑した。 　　そこへ色づいた林の中から、勢の好《い》い中学生が、四五人同時に飛び出して来た。彼等は少将に頓着《とんちゃく》せず、將軍夫妻をとり囲《かこ》むと、口々に彼等が夫人のために、見つけて来た場所を報告した。その上それぞれ自分の場所へ、夫人に来て貰うように、無邪気な競争さえ始めるのだった。「じゃあなた方に籤《くじ》を引いて貰おう。」 　　將軍はこう云ってから、もう一度少将に笑顔《えがお》を見せた。……

「それは罪のない話ですね。だが西洋人には聞かされないな。」

青年も笑わずにはいられなかった。

「まあそんな調子でね、十二三の中学生でも、N閣下と云いさえすれば、叔父《おじ》さんのように懐《なつ》いていたものだ。閣下はお前がたの思うように、決して一介の武弁《ぶべん》じゃない。」

少将は楽しそうに話し終ると、また炉の上のレムブランドを眺めた。

「あれもやはり人格者かい？」

「ええ、偉い画描《えか》きです。」

「N閣下などとはどうだろう？」
青年の顔には当惑の色が浮んだ。
「どうと云っても困りますが、まあN將軍などよりも、僕等に近い気もちのある人です。」
「閣下のお前がたに遠いと云うのは？」
「何と云えば好《い》いですか？　まあ、こんな点ですね、たとえば今日 | 追悼会《ついとうかい》のあった、河合《かわい》と云う男などは、やはり自殺しているのです。が、自殺する前に」
青年は真面目《まじめ》に父の顔を見た。
「写真をとる余裕《よゆう》はなかったようです。」
今度は機嫌の好《い》い少将の眼に、ちらりと当惑の色が浮んだ。
「写真をとっても好《い》いじゃないか？　最後の記念と云う意味もあるし、」
「誰のためにですか？」
「誰と云う事もないが、我々始めN閣下の最後の顔は見たいじゃないか？」
「それは少くともN將軍は、考うべき事ではないと思うのです。僕は將軍の自殺した気もちは、幾分かわかるような気がします。しかし写真をとったのはわかりません。まさか死後その写真が、どこの店頭にも飾《かざ》られる事を、」
少将はほとんど、憤然《ふんぜん》と、青年の言葉を遮《さえぎ》った。
「それは酷《こく》だ。閣下はそんな俗人じゃない。徹頭徹尾至誠の人だ。」
しかし青年は不相変《あいかわらず》、顔色《かおいろ》も声も落着いていた。
「無論俗人じゃなかったでしょう。至誠の人だった事も想像出来ます。ただその至誠が僕等には、どうもはっきりのみこめないのです。僕等より後《のち》の人間には、なおさら通じるとは思われません。……」
父と子とはしばらくの間《あいだ》、気まずい沈黙を続けていた。
「時代の違いだね。」
少将はやっとつけ加えた。
「ええ、まあ、」
青年はこう云いかけたなり、ちょいと窓の外のはいに、耳を傾けるような眼つきになった。
「雨ですね。お父さん。」
「雨？」
少将は足を伸ばしたまま、嬉しそうに話題を転換した。
「また榎　[# 「木 + 亭」、第3水準1-85-67] 《マルメロ》が落ちなければ好《い》いが、……」
[# 地から1字上げ] (大正十年十二月)

底本：「芥川龍之介全集4」ちくま文庫、筑摩書房

1987（昭和62）年1月27日第1刷発行

1996（平成8）年7月15日第8刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房

1971（昭和46）年3月～1971（昭和46）年11月

入力：j.utiyama

校正：かとうかおり

1999年1月12日公開

2004年3月9日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。